

この本の読み方

これはどんな本か

この本は、「データベース検索をとりあえず知っている」というレベルでは不十分だと考える人々のために用意した。ウェブ上の検索システムは概してわかりやすく作られ、誰でもキーワード入力とクリックを繰り返せば目的の情報に行き着ける。熟練すれば操作はさらに迅速的確になるかもしれない。これが「とりあえず知っている」ということで、実際、日常的な場面では誰もがそうやって検索している。しかし研究場面でそのようなやり方だけに頼るのは誤りだというのが本書の著者の考えである。

こうした実用的知識には、分かりやすい手引き書が既に数多くある。この本はより一般的に、読者の方法論的理解を深めることを主な目的とした。類書は「探し方」を解説する実用書だが、この本は佐藤の言葉「『作り方』の作り方」(佐藤雅彦 & 島森路子, 2010)をまねて言うならば、むしろ「『探し方』の探し方」の概説書である。

文献への取り組みについて問題意識を持ち、自身の(または自らが指導する学生や後輩の)研究水準を高めるために何が必要かを知りたいと考える読者にとって、この本は類書と異なる意味で役に立つところがあるだろう。

どんな分野で役立つか

この本が主な読者として意図するのは、看護・保健・助産・リハビリテーション・介護などの領域で研究に取り組もうとする人々である。対象者と全人的に関わるこれらの領域では、問題の多面性・複合性ゆえに実は文献の探し方が難しく、「とりあえず」方式ではつまづきやすい。医学・歯学・社会医学・生理学・放射線・検査・薬理・栄養・臨床心理・代替医療などの領域も、この本で述べたことは概ね当てはまる。トピックスが看護に偏るものの、内容的には問題ない。福祉・心理・教育・医療行政・医療社会学・医療経済学などの領域はテーマによりけりである。それ以外の諸分野、例えば化学・法学・歴史学・経営学・工学などでは、本書と異なる方法論が必要とされる。

どう読むか

おそらくこの本が最も役立つのは、今後研究者として力を付けていきたいと考えている人々にとってである。そのため、この本の叙述の中心は、大学院生・若手研究者の水準に合わせている。

同時に、この本が述べるような知識は研究の初心者から熟練者まで幅広い層で不足している。学部生・専門学校生・現職看護師などの中にも、研究の方法論を身に付けなければと自覚している人々が少なからずいる。また、指導者である教員、上級の看護師、かれらを支える図書館員にも、これらの知識を求める人々がいる。そのためこの本では、初心者向けに初歩的なトピックスを、図書館員・上級者向けにやや細かな問題を付け加えた。

もしもこの本を読みすすむ中で、自分には必要のない知識だと感じられるところがあれば、それはこのようなレベル的な過不足が原因かもしれない。全体を読みとおすことも大切だが、あまりに詳細で必要のない知識や、いまさらと思われる箇所は、読み飛ばしていただいて差し支えない。

ただし第2章から第4章までは、読み飛ばすと後の各章が理解できなくなるので、辛抱してしっかり読んでいただきたい。

他方、各ページの脚注と章末の「参考」は、その問題について特に情報を必要とする読者のためのものである。一見して関心が無ければこの部分を読む必要はない。もっぱら本文のみを読んで先に進みたい。

理論的背景

この本の主眼は、系統的な文献検索の方法論にある。系統的検索は、実務的には多くの検索者のものだが、この本で読者の皆様にお示しするのは、既存研究の発展というより著者自身の経験とその理論的総括によるところが大きい。「系統的探索」・「系統的検索」という用語も、学部・大学院での授業のために案出した。「系統的検索」に近い「comprehensive search」という用語（確立しているとは言い難いが）があることは後になって知った。

文献検索の研究史は、この本の関心に触れる部分に限定してだが、第6章末尾の「参考」にかいつまんで示した。Systematic/comprehensive という考え方はもともと図書館情報学の底流をなす。また本書で述べた技法の多くは1990年前後までに確立され、解説などにも断片的に現れる。だがこれらを全体として見通しよく整理したものになかなか行き当たらないというのが著者の不満だった。研究史のメインストリームではこの問題が解決できそうもないので、著者なりの解決を考えたのがこの本という次第である。

例示、引用、用語について

この本は実用的なマニュアルではない。文中の例示は特定の書誌データベースや検索システムの説明を意図したものではなく、単なる例示である。

検索例は、特に断らない限り本書執筆時点の2010-2012年のものである。ただし検索システムの仕様変更などがあった場合は最新に合わせた。

用語は、しばしばこの本独自の意味と用法で使用している。一般的な定義や用法と異なるときは、初出箇所ですべて簡単に説明した。略語は、カタカナ語や英語でいちいちスペルアウトを繰り返すと却って煩わしい箇所に限り使用した。これについても初出箇所ですべて明示している。

この本は研究書を意図したものでもない。注記や「参考」でごく一部の問題にかいつまんで触れたのを除き、本文中での図書館情報学や知識社会学の議論は控え、文献引用も限った。また独自のものもそうでないものも含め、この本で中心となる用語や概念について必ずしも典拠引用をしていない。引用をすれば言うべきこともあり、議論を始めると概説書の枠を外れてしまうからである。ただし自他の意見を最低限区別するため、読者の参考のため、また歴史的叙述などのため、多少の文献は示した。例示や証左のための文献引用は各ページ脚注または文中に、重要な文献は巻末に示した。記述はほぼAPAマニュアル6版のスタイルだが、脚注・文中での引用は、詳細な書誌事項が必要なければ、状況に応じて他のより簡略なスタイルとした。

この本で述べなかったこと

書誌データベースの系統的検索だけで文献探索が完結するわけではない。特に、引用・引用調査と文献利用に関する知識は、この本の内容と密接に関係する。しかしこの本ではこれらに触れなかった。これらは類書で比較的良好にカバーされ、また何もかもこの本で述べるのは無理があるためである。